

御嶽蔵王権現 黒漆塗金細工御朱印帳

令和五年・大口真神式年祭を記念した授与品として頒布をはじめた特別な御朱印帳。製作は、先の酉年式年大祭時の社殿修復事業が縁となり御岳山に工房をかまえました御師ならぬ塗師。「塗師屋秋道」の秋道恵一さんにお話を伺いました。

こんな御朱印帳ないで！

製作のきっかけは？

ある御師さんから「作れませんか」言われたことなんやけど。作れるで！言うて。東京藝術大学出身の小山真徳さんにデザインしてもらって。

塗って研いで塗って研いで、三回塗ったんよ。片面は白木のままやさかい、反らんようにとか神経遣ったわ。乾かし方に特徴があると聞きました。

漆はな、湿度がないと乾かへんねん。

「ムロ」いうところに入れて、湿度を保ちながら二十四時間。最後の漆は刷毛目とかがあんまり目立ってしまいうさかいにもっと時間かけて、びやーんって伸びるように馴染ませたらんで。

時間かかりますね！ 製作期間は？

乾かすだけでも一日やろ。出張先でも夜な夜な研いだりしながら…合計で一年半くらいやな。

秋道恵一（あきみちけいいち）

滋賀県彦根市出身。

伝統工芸士。文化財保存修復学会会員。

仏壇をはじめ、全国の社寺建築や修復に携わる。平成二十九年より当山に工房をかまえ、関東圏を中心に文化財修復に携わる。



道具について教えてください。

定盤じよばんは塗り台。刷毛は人間の髪の毛。女性の髪の毛。鉛筆と一緒、板の端から端まで入つとる。使いやすいように刷毛を加工したりもするし、フシを取る針も柄ついたりして自作してとる。

建物など大きい物を塗る時とは違う？

違う違う。違うし、手に取るもんっていうのはめっちゃ気い違うのよ、やっぱり。フシも全部取って。

手に持って見やるわけやんか。だからすごい、やっぱり綺麗に仕上げなあかんって。

※フシ：表面に付着した細かいごみ

金細工について教えてください。

「沈金ちんきん」やで、彫つとるんや。

その上に漆塗って、金粉を撒いて。ほいで、ワタでわーつと撫でて馴染ませていくねん。これが難しい。塗る漆が多いと金粉が沈んでまっけて表に出えへんねん。せやから薄く、薄くひいて。大変やさかい、あんまり細かいと嫌がられんねん（笑）

裏面の通し番号は大きくすね。

どうしようか迷ったわ。壹、貳、参あたりはわかるけど。面白いやん！まあ手にはした人が読めるか？とも思ってたけど…調べたらわかるやろって（笑）

手もとで育っていくんですね！

あと、手に持つやんか、手の脂ついてツルツルになる。そうやってまた味が出てきよる。

こんな御朱印帳ないで！



お手入れについては何かありますか？

汚れたら日本てぬぐいで拭く。化学繊維は傷つく。黒の漆は、漆と鉄の化学反応で黒くなるんよ。せやから紫外線に弱いねん。顔料など何も入ってないさかいに、曇るように白くなる。

「御岳山の紙垂しで」

お社の鳥居等はもちろん、ご家庭でも神棚にお飾りされる注連縄（しめなわ）。紙垂（しで）と呼ばれる半紙を裁断したものをつけて、お飾りするのが一般的です。

日本の先祖たちは古くから、山嶺や大きな岩などといった「自然の中」に神々を見出し信仰してきました。注連縄には、それら神々のいらつしやる場所やモノを俗世と切り離し、悪霊の侵入を防ぐ結界のような役割をしたり、そこが神聖な場所である標示をする、という意義があります。

神社では鳥居をはじめ各お社の正面に飾られ、そこが信仰の対象であることを示しています。

紙垂は張られた注連縄に四つ若しくは八つ、注連縄に挟み込んで飾られます。その形からも想像できるように、稲妻を模して作られているといわれています。稲妻とは「稲の妻」。稲は雷の光を浴びてお米を実らせる、雷が落ちると豊作になるといった信仰が生まれ、また雷は「神鳴り」ともいわれ、邪気や悪霊を祓う意味もありました。紙垂もそのような人々の願いや信仰を具現化し、神様のいる特別な場所を表すものです。

基本的な形はどの神社でも同様ですが、御岳山に古くから伝わる紙垂は他の神社には見られない形で裁断されています。皆様も是非、実際にご覧になってどこが違うのか見つけてみてはいかがでしょうか。

（文 権禰宜 馬場慶太郎）



徒然じぜんばなし

『何足の草鞋？』（消防団篇）

権禰宜 久保田享



私が、この山に奉仕して早二十年が立ちました。神社に奉仕し、家ではお客様をおもてなし、観光ではイベントにに参加し、消防団員でもあります。その中で今回は消防団活動について少しだけ、お話ししたいと思います。

基本の消防団活動は住民の生命と財産を守る事が活動となります。火災や、天災など活動は多岐に渡ります。その中でも御岳山だけ（？）と思える活動内容があります。それは山岳救助です。東京都の一大観光地で年間50万人近くがこの山を訪れますが、その中には軽度の怪我から命に係わる重傷も数多くあるのです。下山途中疲れもあるのか、事故の多くは十五時以降に起こります。登頂した事に満足すると、つい注意を怠って滑落や捻挫等をする場合があるのです。

傷病者が警察や消防に連絡すると、一早く私たちに連絡が来ます。署隊が到着するまでに三十分以上かかるため地元消防団の出番という訳です。自宅から活動服に着替え、先ず詰所に集合。情報収集や装備を揃え、現場に飛んでいきます。そしてすぐさま容態観察と応急手当をし、その間も無線連絡で消防署と連携し、歩行の可否を確認して担架搬送をします。急傾斜地も場合もあるので担架搬送は筆舌に尽くしがたいです。

団車両から救急車に引き渡した時、御家族から「本当にありがとうございました。おかげで無事に家に帰る事が出来ました。」と笑顔で話される時には、これから帰ってお泊りのお客様の準備をしなくてはならないという事も忘れられる瞬間です。

活動をしていると、人名救助の大切さや、自分の置かれた環境がいかに特殊かを痛感させられます。登山においてはどんな低山でも十二分な準備はとても大切です。御岳山にいらつしやる時には、準備を整えて、楽しい思い出を作ってもらいたいと思います。



（次回へつづく…）